

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (18)

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。それらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、彼らの言説の誤りを総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。

注本文中、真の父母様のみ言や「原理講論」等は「青色」で、サンクチュアリ教会や郭グループ側の主張は「茶色」で色分けしています。
(教会成長研究院)

【33】天一国の永遠の中心は、天の父母様と真の父母様

——「真の父」とともに「真の母」を重んじなければならぬ

①モーセ路程の二つの石板は、「真の父」と「真の母」を表す

真のお父様は、「真の父母」について次のように語っておられます。

「神様が、今まで歴史的に願ってきた摂理の目的とは何でしょうか。真の父母の基準です。人類が墮落した以後、今まで蕩滅

歴史をしてきたのは、何をすためでしょうか。真の父母を探すためです」(八大教材・教本『天聖經』一八三ページ)

「本来、神様の創造理想は何かというと、真の父母の名を通じて天国の王国と地上の王国を完成することです。……真の父母の名をもたずには、地上天国と天上天国は生じません。……天上天国と地上天国は、真の父母の完成と愛の基盤を通してのみ成し遂げることができるものです。霊界に行つて王国を統一

かだったので、楽園に行っているのです」とあるように、イエス様は地上で実体の「真の母」を立てることができなかったため、天国を完成できませんでした。創造理想の基準において、神様は「人(アダム)がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」(創世記二・18)と言われ、第二のアダムであるイエス様の場合も、「父は別に助け主(聖霊)を送つて、いつまでもあなたがたと共におらせて下さる」(ヨハネによる福音書一四・16)と語られました。

再臨摂理においても、「真の父」と共に「真の母」が現れてこそ、初めて人類の「真の父母」となり、神様の創造理想を成し遂げることができるのです。

ところで、サンクチュアリ教会側では、「血統」について語るるとき「皇太后(注:真の母)は王にはなりません。なぜなら

するということは真の父母の使命であつて、ほかの人の使命ではありません。イエス様は真の父母になることができなかつたので、楽園に行つて居るのです」(同、一七三九ページ)

「すべての出発は、真の父母からです。あらゆるものの出発、最初は、皆さんではなく真の父母です。生きるのも、行動するのも、愛の家庭を連結するのも同様です。最初は真の父母です。これは先生の話ではなく、私たちの最初の先祖に対する神様の公式的な概念です」(同)

神様の摂理の目的は「真の父母を探すため」であり、真の父母によつてのみ「天国は……成し遂げることができる」というのです。それゆえ、復帰摂理に現れる象徴的、形象的な内容には、さまざまな意味で「真の父母」が表示されていることを知らなければなりません。例えば、モーセ路程における「雲の柱、

月号、三〇ページ、「九・九節」のみ言)

真のお父様は、「母親の血統のゆえに、私が生まれた」と語っておられます。女性も血統を持つて居ることを知らなければなりません。

②天国(天一国)は、真の父母を中心に人類が一つになつてこそ実現される

カナン復帰を成し遂げたヨシユアの路程は、再臨路程を表示します(『原理講論』三九四ページ)。このヨシユアの路程について『原理講論』は次のように論じています。

「彼らが十二の石を取つて、カナンの地の落ち着いた宿营地に、ひとところに集めて置いたとき、ヨシユアは『このようにされたのは、地のすべての民に、主の手に力のあることを知らせ、あなたがたの神、主をつねに恐れさせるためである』(ヨシユ

火の柱」「二つの石板」は、真の父母を象徴しています(『原理講論』三六九、三七二ページ)。真のお父様は、二つの石板について「イスラエル民族が……滅亡するのを心配されて、神様がモーセをシナイ山に呼ばれ、四十日間モーセに断食をさせて二つの石板を与えられました。それが何であつたのかといえ、アダムとエバ、『真の父母』を象徴していたということを知らなければなりません」(『ファミリー』一九九八年四月号、一七ページ)と語られました。

二つの石板は宇宙を象徴する「契約の箱」に入れられており、それは宇宙の「中心」を意味するものです。分派活動を行う人は、「真の父」のみを重んじ、「真の母」を軽んじる傾向があります。石板が「二枚」あるように、「真の父」と「真の母」の両方を重んじなければなりません。前述のみ言に「イエス様は真の父母になることができな

ア四・24)と言つた。これは、将来石として来られるイエスに仕える十二人の弟子たちが、一つの心で一つの目的に向かい、一つの所で一致団結してこそ、世界的カナン復帰を完成して、神の全能性を永遠にたたえることができるということを、予示してくださつた」(三九六ページ)

神様が「再臨路程」を予示するヨシユアの路程で見せてくださったように、再臨主である「真の父母」を中心に子女たち(アベルとカイン)が一致団結してこそ、世界的カナン復帰を完成させ、永遠の「天一国」が実現されるのです。

天国(天一国)の中心は、神様と一体となつた「真の父母」であり、子女ではありません。神様がヨシユアの路程で予示されたように、真の父母様を中心に「一致団結」すべきことを明確にしなければなりません。真のお父様は、二〇一〇年七

月十六日、いわゆる「ポート会議」で「顯進は先生と同じ方向に向いていない。逃げ回っている。顯進が先生の方向に來なければならぬんだよ」「顯進が先生の方向に合わせられないから駄目なのだ」「統一運動はもっと遠く深くもっと難しくなってくる。先生にすがっていかないと駄目だ。これからももっと複雑なことが起こるかも分からない。三人の息子たち（顯進様、國進様、亨進様）が違った方向の考えを持つているが、共に行く方向でやらなければ大変だ」と語られました。今日起こっている問題は、「真の父母」を中心にした子女たちが一致団結してないために生じていると言わざるをえません。

郭グループ側に立つ人は「顯進様こそが長男であり、後継者である」と語り、サンクチュアリ教会側に立つ人は「亨進様こそが正統な後継者である」と語って、互いに相手を牽制する

かのように主張し合っています。しかし、真の父母に「後継者」は存在しません。人類の「真の父母」は永遠に、一組であり、それは「文鮮明・韓鶴子ご夫妻」です。

また、天一国の「万王の王」も一組の夫婦しかおられず、それは神様と一体となられた天地人真の父母様（文鮮明・韓鶴子ご夫妻）です。子女様の立場は「後継者」ではなく、信仰の「相続者」であり、真の父母の「代身者」にすぎません。そしてたとえ子女様であられても、その正統な「相続者」「代身者」となるには、真の父母様との完全一体がなされなければならぬのです。

真のお父様は、天国の門は「真の父母」であると語っておられます。

「地獄が二つあります。地上地獄、天上地獄がありますが、天国の門は一つです。地獄の門

が開くからといって、地上から天国に直接入っていくのではありません。真の父母を通して入っていくのです。真の父母を通して入っていく門が、一つの天国の門です」（八大教材・教本『天聖經』二二〇ページ）

「人類が偽りの父母から出発したので、天国の門を開いて入るには、真の父母が出てこなければなりません。神様も、自ら天国の門を開くことができませぬ。神様が自ら天国の門を開くことができるなら、そのような能力がある方が、なぜしないでしょう。か。墮落は、人間がしたために、罪を犯した人間が罰を受けなければなりません。人間が天国を失ってしまったから、人間が取り戻さなければならぬのです」（同、六七八ページ）

天国の門は一つであり、それは「真の父母」です。前述したみ言に「すべての出発は、真の父母からです。あらゆるものの

出発、最初は、皆さんではなく真の父母です。生きるのも、行動するのも、愛の家庭を連結するのと同様です。最初は真の父母です」とあるように、私たちは全ての始まりの基準を「真の父母」に置くべきです。

ある人は、子女様の願いを受けて、「自分こそが父母様と子女様の間を執り持つのだ」と主張しています。しかしそのような言動は、出発点、軸を子女様に置いているのであって、「真の父母」に置いてはいけません。その言動は「天の願い」からずれているということを理解しなければならぬでしょう。

かつて、真のお父様は、顯進様に従う人たちを「郭グループ」と表現され、「従う人たちの話を聞いて、子女が親の下に來ない」と語られ、怒りを露わにされました。

真のお母様も、サンクチュアリ教会問題が起こったとき、「万が一にも、あれこれ言いながら

『少し助けてあげよう』と（誰かが）言っても、それに対して

揺らいではいけません。（子女様を）助けてあげないことが助けてあげることです」（『トゥデイズ・ワールドジャパン』二〇一五年陽曆九月十日号、四ページ）と語られました。

「真の父母」と一体となっておられない子女様に従う人は、結果的に真の父母様の息子を奪った張本人となり、真の父母様と子女様の間を裂く者となってしまうのです。

その事実を、私たちは客観的、かつ冷静になって見詰め直し、ヨシユアの路程で論じられているように、「イエスに仕える十二人の弟子たちが、一つの心で一つの目的に向かい、一つの所で一致団結してこそ、世界的カナン復帰を完成して、神の全能性を永遠にたたえることができるということを、予示してくださった」という「天国実現の道」を見詰め、み旨に邁進しなければ

なりません。

③真のお父様との地上での最後の生活

私たちが人生を終えようとするとき、最愛の人と共に過ごしたいと願うものです。真のお母様は、次のように語っておられます。

「（聖母病院から）退院されて天正宮博物館にいらっしゃった一日の間、真のお父様は周囲の補佐官らに『きょうは、オンマと向かい合って食事したい』とおっしゃいました。いつも私は真のお父様の横に座って一緒に食事をしますが、その日だけは『向き合ってオンマの顔を見ながら食事がしたい』と言われるので、そのように食事の席を準備してさしあげました。そのようにしたところ、真のお父様はお食事を召し上げがらずに、私の顔だけをじっと見詰めていらっしゃったのです。恐らく真

のお父様のお心の中に私の顔を刻みつけておられたのでしよう。

……そのような時間があったので、私はさらに深刻になりました。……時々み言の中で『私が霊界に行く時になった。私は行く時を知っている』などといった内容を数多く語られたのですが、そのような準備をされた最後の期間であったことは間違いありません。……『少し休んでください』とお勧めすると『オンマの膝で横になりたい』と言われながら、うたた寝をされたりもしました。健康でいらっしやうたときには全くなさなかつたそのような行動を……：幼い子供がお母さんを必要として頼ってくるように、いつも私のそばに一緒にいたがられたのです。……

私は今、毎日真のお父様と対話をしながら過ごしています。……真のお父様が聖和されたその瞬間、私は真のお父様が人類のために願われ、志された内容を

を、私の命が尽きるその日まで成就してさしあげると約束したではありませんか。そのため今、私は忙しいのです」（同二〇一二年陽曆十一月十日号、一六―一八ページ）

真のお父様は、地上での生涯を終えようとするとき、最愛の人であられる真のお母様と共に過ごしたいと願われ、お母様はその願いをかなえてさしあげられました。そしてお母様はお父様の生涯の願いである天一国実現を果たそうと今「中斷なき前進」をしておられます。

私たちは「最終一体」となられた真の父母様を絶対中心に、ビジョン二〇二〇を勝利的に迎えられるように「一致団結」して走り抜いていかなければなりません。我々がそのような姿勢で歩んでこそ、今、独自の道を歩まれる子女様の問題も、世界のさまざまな問題も、真の父母様を中心に收拾されていくのです。